

中島楽章・伊藤幸司編

『寧波と博多』（東アジア海域叢書 11）

汲古書院 二〇一三・三刊

A5 四七六頁 七〇〇〇円

本書は科研費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生」（いわゆる「にんぶろ」）の計画研究のうち、「十一〜十六世紀の東アジア海域と寧波—博多関係」・「寧波地域における日明交流の総合的研究」の成果を収録する。本書第一部が主に前者、第二部が主に後者の成果を反映する。

序論・中島楽章「寧波と博多」は、本書の課題（二〇世紀末〜一六世紀の日中—博多・寧波間交流の諸相の復元、研究史整理、本書所収各論考の要約を示す。

第一部「貿易・軍事と物の移動」。山内晋次「日宋貿易と「トウボウ」をめぐる覚書」は、「トウボウ」地名を中国人居留地に比定する近年の説を批判する。小畑弘己「寧波・博多交流の物証としての寧波系瓦の化学分析」は、博多遺跡群等の一二〜三世紀の遺構出土の寧波系瓦が寧波市周辺の製作たる可能性が高いことを蛍光X線分析の結果から示す。中島楽章「元朝の日本遠征艦隊と旧南宋水軍」は、元の第二次日本遠征の江南軍艦隊の実態（とくに軍船調達・船種）を文献史料・絵画資料・水中考古資料から総合的に論じる。呂晶森「十〜十六世紀の東アジアにおける扇の流通と伝播」は、宋〜明への日本扇・高麗扇伝播の実態を語る。佐伯弘次

「室町時代の博多商人宗金と京都・漢陽・北京」は、一五世紀の僧かつ博多商人たる宗金の京都・漢陽・北京行を復元し、その意義を語る。

第二部「外交秩序と文化交流」。伊藤幸司「入明記からみた東アジアの海域交流」は、遣明船で入明した禅僧の渡海日記を主要典拠に遣明船の航路・航海技術・航海神信仰・渡海者の死の実態を復元する。橋本雄「『中華幻想』補説」は、胡越・中華・皇帝などの語の解釈、義満の明使接遇儀礼、義持の対明断交等の諸問題につき氏の原著『中華幻想』を補足する。岡本弘道『外夷朝貢考』からみた明代中期の国際システム」は、『外夷朝貢考』が礼部官僚の撰述であり、嘉靖中期の彼らの問題関心を反映することを示す。米谷均「日明・日朝間における肅拜儀礼について」は、皇帝・國王への謁見時の表敬儀礼たる肅拜の明・朝鮮・日本の比較を行い、中世日本の外交儀礼の特異性を示す。

第三部「史料研究」。西尾賢隆「博多承天寺入寺疏」は、博多承天寺への僧侶入寺に際し作られた入寺疏の解説。須田牧子「妙智院所蔵『初渡集』卷中・解説」・伊藤幸司ほか「妙智院所蔵『初渡集』卷中・翻刻」は、策彦周良の入明記『初渡集』中巻の解説ならびに策彦自筆原本に拠る翻刻。

巻末の監修者（小島夢）の言にもあるが、当研究の特徴は「学際性」—方法論の複数性にあり、またあえて寧波・博多に地域を限定することで「点と点をつなぐ数多くの線を具体的に解明」する点にある。その方法論を遺憾なく発揮した、含蓄ある成果である。

（高木久史）